



星光社 75年の歩み

■沿革

2026年、星光社は、75回目の事業年度を迎えております。

これは、創業以来、多くの方々が、バトンを繋ぎ続けている証です。

そこで、今回は、積み重ねられてきたことに感謝の意を込めて、これまでの軌跡を振り返ります。

1949年 創業（東京都杉並区）	1950年 電気通信線材製造指定業者に登録
1952年 株式会社星光社設立 警察本部_電気通信機器製造業者に指定	1960年 日本電信電話公社_機材製造業者指定
1964年 東京都府中市に工場移転	1965年 日本国有鉄道_業者登録
1968年 北海道電力(株)_取引開始	1978年 東京電力(株)_取引開始 札幌駐在所の開設
1986年 府中第一工場の新築	1987年 千歳工場の新築
1992年 府中第二工場ビルの新築	1999年 沖縄電力(株)_取引開始
2002年 ISO9001取得	2006年 東北営業所（仙台市）の開設
2008年 ISO14001取得	2013年 那覇営業所の開設
2014年 防衛省第三者監査監督審査の適用	2016年 株式会社オール星光設立
2022年 東北営業所を府中工場へ統合	



■最初の一步

星光社の前進、桜星社は、1949年（昭和24年）1月、創業者_寺嶋 功氏により創設されました。社名は、北海道大学の体育会応援歌「桜星会歌_瓔珞（ヨウラク）みがく」からと伝聞されています。寺嶋氏は、独創意欲の旺盛な人で、終戦以前、満州電々に勤務の頃より考案した通信ケーブル用「接続端子函（たんしかん）」を電気通信省に納入するのが、会社創設のきっかけでした。

1950年（昭和25年）4月6日には、電気通信省_電気通信線材製造指定業者として正式に登録を受けることができました。

ちなみに、この4月6日が、現在の星光社創立記念日となっています。

あわせて、東海無線(株)からの「真空管式ポータブルラジオ」の組立作業を請け負うことになり、その数年後には、ソニー(株)から「トランジスタラジオ」の製作を請け負うようになりました。

これにより、三鷹市牟礼に工場を操業し、ラジオの生産用ベルコトンベアを設けるまでになりました。

その後の1952年（昭和27年）3月27日には、

株式会社星光社を設立することとなりました。

社名の星は、北の天空で動ずることなく光輝く北極星（ポラリス）を指し示しています。

星光社には、「立ち位置を見失うことなく、明白な存在たるべし」との意味が、込められています。

設立当時の星光社では、引き続き、電気通信省の電気通信線路機械業者として、柱上通信ケーブルの相互接続を行う「ケーブル端子函（たんしかん）」を製造しておりました。



■接続端子函

本局は市内OCPケーブル相互の直線接続、分岐接続及び加入者線外線の引出し、SDFワイヤの分岐点に用いるもので200形と400形の2種類があります。また、200形、400形ともに側面を現出させることによって直線用、分岐用あるいは両分岐用として使用することが出来ます。本局はケーブルあるいは支持部に自重取付けの構造で図内には加入者線外線とケーブルとの接続に用いる4対端子ブロックを右側まで装着することが出来ます。



■ヒット商品の設計生産

1950年頃、警察では駐在所に設置する電話機を必要としていたが、適当な装置が無くて困っていましたが。これを聞き付けた創業者_寺嶋社長は、試作を引き受け、当初は岩通の下請で開発を行っていましたが、1952年（昭和27年）5月に国家地方警察本部から電気通信機器製造業者の指定を受け、1958年（昭和33年）、警察庁の通信学校研究部にて、開発された、トランジスタを用いた「周波数式個別呼出装置」の設計と生産に取り組むことになりました。

そして、この「周波数式個別呼出装置」は、日本電信電話公社（現在_NTT）に評価され、1960年（昭和35年）3月に、線材製造指定会社に登録されることとなりました。

その後、1962年（昭和37年）には「周波数式個別呼出装置」を量産化して、1964年度末には、全国



警察庁の駐在所計 10,705 箇所全てのみに設置されるまでになりました。

「周波数式個別呼出装置」とは、トランジスタ（半導体素子）により、周波数信号（トーン信号）を用いて、接続されている電話機から、特定の相手を選別して呼び出すことができる電話機でした。

ただ、当時は、着信信号の回数を聞いて、自分が呼び出されているのか否かを判断するため、誤って応答することも少なくありませんでした。

「周波数式個別呼出装置」は、警察以外にも、国鉄、私鉄、電力、放送等の各社に採用されていきました。そして、「周波数式個別呼出装置」の原理は、専用の通信回線に電話機を多数接続して使用することができる「個別呼出電話機」の開発生産に応用されました。

「個別呼出電話機」の開発生産は、その後の複数回線を集約して、通話を可能とする「集中電話装置」、「小形集合電話装置」、「一斉放送装置」などの業務指令用電話システムの開発全般に繋がっていくこととなります。

■防災情報システムの設計生産

1987 年（昭和 62 年）4 月、国鉄が分割民営化されて、JR 東日本が発足しました。

その当時の JR 東日本から、国鉄の時から納品していた指令用電話システムのノウハウを活用して、電話回線を用いて、気象観測データの常時収集とリアルタイム表示ができないかとの相談を受けました。

JR 東日本と星光社で協議と検討を重ねて、1989 年（平成元年）4 月に、「防災情報システム/PreDAS」の開発に着手することとなりました。

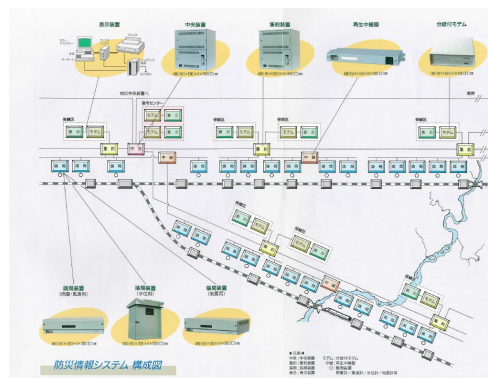
当初の観測種別は、地震/雨量/水位の 3 種類でしたが、その後、観測種別の拡大や、他の管理/通告システムとの連携が図られています。

防災情報システムは、全てを自動化せず指令による判断を残し、あわせて、以下の観点でシステムを設計することで、信頼性と可用性を向上させ、列車事故を未然に防いでいます。

- ① フェイルセーフ…故障しても異常動作しない
- ② フールプルーフ…異常操作が重大事故につながらない
- ③ システム冗長化…故障があっても他に代替させる構成



東日本旅客鉄道 防災情報システムPreDAS納入



JR 東日本では、20,000 km以上の通信ケーブルを整備し、エリア全体を自営ネットワークでカバーしています。

そのネットワークには、300 以上のシステムが利用されており、列車の安全運行を支えているシステムのひとつが、「防災情報システム/PreDAS」です。

現在は、「3rd_PreDAS」として、2030 年のシステム更新に向けて、拠点装置、及び集約装置、IP 地震端局装置等の設計開発に取り組んでいます。

■北の大地へ（千歳工場）

星光社、第2の生産拠点、千歳工場は、1987年（昭和62年）10月に、北海道千歳市の臨空工業団地に建てられました。

工場を建てる前は、1978年（昭和51年）4月に札幌駐在所を開設し、当時、府中工場にて製作していた「遠方監視制御装置」にかかるサポート業務を行っていました。

1978年（昭和53年）9月には、星光社にて、CPUを使用した最初の製品「営業所集中監視用配電用変電所遠方監視装置（略称集中型スーパー）」を開発し、北海道電力に納品しました。（営業所39台/電気所222台）

その後、北海道電力では、配電設備（電線/変圧器/開閉器など）の遠隔監視と制御の自動化（配電自動化）が推進され、星光社においては、昭和60年（1985年）に「柱上開閉器遠方監視制御_子局装置」の初号機を開発しました。



この時に、北海道電力では、「地場企業の優先的且つ積極的な活用」という方針を掲げておりました。

これを背景として、お客様から選ばれる地域密着型の企業を目指すべく、星光社は、北海道千歳市泉沢に、千歳工場の設立を決定しました。

当初は、北海道エリアの営業/生産の拠点として工場を新築し、その後、工場の増築と、従業員の増員を行い、1990年（平成2年）には、技術部門を立ち上げました。

受注から、生産、出荷、サービスまでの一貫したサービス体制を構築することができました。

その後は、1999年（平成11年）には、沖縄電力向けの「遠制II型子局装置」を開発し、2021年（令和3年）には、北陸電力向けの「センサー子局装置」の開発を行い、北海道電力以外の電力会社との取引を開始することができました。

私たちの生活の変化とともに、欠かすことができない電気をつくり、そして、私たちの所まで供給する環境も日々変化しています。

また、電力会社では、激甚化する自然災害の影響を考慮し、計画的な設備投資に取り組んでいます。（レベニューキャップ制度）

星光社_千歳工場は、電力会社の設備管理と運用の効率化、業務の省力化に貢献し、社会に役立つ工場であり続けます。

■製品開発の実績



1950	電電公社（現NTT）向け電話ケーブル屋外端子函製造
1960	個別呼出装置の開発
1962	集中電話装置の開発
1970	発電所テレコン装置の開発
1973	電子交換機（アナログ式）の開発
1975	配電線事故区間表示装置の開発
1980	電子交換機（デジタル式）の開発
1983	配電線柱上開閉器遠隔制御の開発
1985	CRT表示方式監視システム
1990	防災情報システムの開発
1991	定常状態監視システムの開発
1993	タッチパネル式集中電話装置の開発
1996	遠隔自動検針システムの開発
1997	新型配電テレコン装置の開発
1999	画像伝送システムの開発
2003	IPアダプタの開発 高圧自動開閉器用低圧子局装置の開発 エコーキャンセラ回路の開発
2004	潮流計測装置/データ収集装置の開発 簡易リクローザ子局装置の開発
2005	双方向増幅器の開発
2006	磁石・テレスピ用IPアダプタの開発 配電線搬送中継装置の開発
2007	IP接点伝送装置の開発 1.5MデジタルMUXの開発
2009	電源監視機能付 瞬時励磁子局の開発
2011	IPテレスピ連絡電話装置の開発
2014	一斉指令放送装置(FTC28A)の開発
2019	次期防災情報システムの府中工場と千歳工場の共同開発 定常IP変換装置の開発
2022	次期指令用集中電話システムの開発



ここに記されている製品開発の実績は、創業以来、星光社が社会に提供してきた製品の一部にすぎません。これまで、星光社は、鉄道、電力会社を中心に、情報通信機器を開発し、高い評価と信頼を得ています。星光社は、これからも、これまでに培ってきたモノづくりのノウハウを活かして、社会に貢献していきたいと考えています。

～参考～

- 株式会社星光社のあゆみ（嶋孝行/興野親美）_2008年12月
- 株式会社星光社_会社概要及び社員募集要項
- 株式会社星光社_経歴書
- 株式会社星光社_製品カタログ
- 株式会社星光社_会社案内（第1版～第8版）
- 株式会社星光社_千歳工場のご案内

■創立 75 周年記念寄稿

令和 8 年 2 月

株式会社星光社 会長 武藤 清

私は終戦の昭和 20 年生まれで、戦後の米国主導の民主主義と共に育ちました。元英国首相チャーチルは「民主主義は最悪の政治形態である。これまでの他の政治形態を除けば、だが」という有名な言葉を残しました。民主主義は最悪だが他の政治形態よりはまだマシだという、シニカルで消去法的な表現で民主主義を評価したのです。

自由、平等、個人の尊厳、暴力（戦争）の否定など、私も民主主義の実現に貢献したいという思いは常に持っています。昭和 21 年には女性に初めて選挙権が認められて総選挙が行われました。80 年前は女性には選挙権がなかったということは今では想像も出来ません。昨年、日本初の女性首相が誕生したのも感慨深いものがあります。

経済の体制は資本主義が席卷した時代でした。理想的な人格の人間が大多数であることを前提とした共産主義は、現実には、独裁者を生み、生産性の低い怠惰な国民を生むというような結果となりました。大多数の人間は、社会正義も実現したいし個人の欲望も満たしたいという矛盾に満ちた望みを持つ生き物です。社会全体が豊かになるために、一生懸命に働けば地位やお金も得られるという欲望をうまく活用した経済体制が戦後の資本主義といえます。全ての人に均等に機会が与えられ、ある程度の結果の不平等は受け入れるという民主主義的な考えにも基づいた「健全な資本主義」というものです。事実、この「健全な資本主義」は、戦後の復興からバブル期まで概ね成功した経済体制でした。

私が星光社へ来て過ごした時期は、バブル崩壊後の失われた 30 年にほぼ重なりますが、この 30 年は「戦後の民主主義と健全な資本主義」がほころびを見せ始めた時代と言えます。振り返ってみますと、私はこの 30 年間、入社前に社会人として体験した「戦後の民主主義と健全な資本主義」を再構築する思いで星光社の経営にあたっていたのではないかという気がします。

結果的には星光社は好業績で 75 周年を迎えることができました。役員、社員、株主の皆様には長きにわたる努力と献身に、お客様、取引先様をはじめ関係各位には長きにわたるご指導ご鞭撻に、心より御礼申し上げます。

一方、この 30 年の間にはサリン事件、いじめ問題、ニューヨークのテロ事件、神戸震災、東日本震災、それに伴う原発事故、コロナなど、私の想像を遥かに超えた不穏な事件が起きました。直近では、ロシアによるウクライナ侵略、ガザへの武力介入、ベネズエラ大統領奪略など民主主義を根幹から揺るがす大事件が起き、何ともやりきれない気持ちです。80 年間戦争を知らない人生を送れた幸運と自負が音を立てて崩れ、衝撃と戸惑いを覚えます。この 30 年に起きた数々の不穏な事件は現在起きている大事件の予兆ではないかという思いもします。いじめの問題は、国家が戦争によって問題を解決しようとするのと無関係ではないという直感です。想像を超えた状況が起きているという戸惑いと同時に、その対策が直ぐに浮かばないということも私の戸惑いを増幅させています。その答えは若い皆さんへ託すしかないというのが私の今の結論ですが、「民主主義や健全な資本主義」の本質は忘れずに時代に相応しい新しい体制に変わっていくことを願っています。バブル崩壊以降の 30 年はこの大きな変革への助走期間とも言えなくはありません。

最近気になるのは社会のあらゆる場面での格差です。国内では中間層が薄くなり貧富の格差が静かに進行し、地球レベルでは、貧富の格差はもとより、国家・人種・南北格差、戦争と平和の格差、情報格差などますます格差が拡大しているように感じます。新しい体制とはこのような格差を是正してゆくものでなくてはならないでしょう。

我々小さな会社の星光社もこの大きな変革と無関係ではなく、むしろ我々の小さな会社の変革そのものが大きな変革を構成していくのだという気概が必要です。また、会社も、かつてはひとくちに日本型と言われたような同一モデルを目指していましたが、これからは多様なモデルが出現するのではないのでしょうか。中小企業は中小企業の、製造業は製造業の、星光社は星光社の、独自の会社の運営・組織をつくり出さなければなりません。四半世紀後の創立 100 年には、星光社がどのような会社になっているか楽しみです。

「変えられることを変える勇氣、変えられないものを受け入れる受忍の力、そしてその両者を見分ける叡智を、神よ与えたまえ!」。米国の神学者ラインホルド・ニーバーの言葉です。

私からは「明るく!、楽しく!、元気よく!」。星光社に幸多からんことを祈ります。



荒木社長 / 武藤会長 撮影 2026 年 2 月 24 日

■ 創立 75 周年を迎えて

2026 年 2 月

株式会社星光社 代表取締役社長 荒木康孝

Q なぜ、創業からの事業概要を社内報に記そうと思ったのか?

A 私が、星光社の代表者に就き 3 年が経過しました。

改めて、これまで製作された会社案内や、製品カタログなどに目を通しました。

特に、星光社 OB の嶋孝行様と興野親美様が残してくれた「株式会社星光社のあゆみ」には、知らない事柄も記されており、何度となく読み返しました。

そして、星光社の軌跡をみなさんと共有したいという思いが沸き上がりました。

これは、ただ、懐かしさを感じるだけではなく、ここに、星光社が社会に存在する意味合いがあると感じたからです。

Q入社してから印象深い事柄はありますか？

A 正直、何か一つ、二つを選ぶことが難しいです。

ただ、今思うに、私の恩師_樋口先生が、当時専務の老田得之様と学友で、星光社を奨めてくれたこと、そして、就職先に星光社を選択したことが大きなターニングポイントだと思っています。なぜなら、この繋がりによって、みなさんと出会い、一緒に仕事ができたからです。

数学は得意ではありませんが、奇跡的な確率ではないかと思っています。



松谷工場長/老田氏/荒木社長 (2019年12月)

Q創業からの事業内容を振り返り、何か得られたことはありますか？

A ひとつは、世の中の変化に気付かされました。

同じ指令電話でも、開発当初と現在製作している製品では、形状や取り扱い方法など異なることです。そして、もう一方で変わらないこともあるという事に気付かされました。

それは、私たちが提供している製品や、システムに求められていることです。

「迅速かつ確実に、音声やデータを伝えること」これは、変わっていません。

Qこれからの星光社どのようになりますか？

A 星光社の強みは、ハードでモノづくりができることなので、AI や、無線通信などのデジタル技術を製品やシステムに組み込み、ハードでモノづくりができるこの強みをこれからも活かしてしていきたいと考えています。

そして、今の世の中は、お互いに協力することで、社会を作り上げていく時代です。

星光社が持ち合わせていないノウハウやスキルがあれば、これを持ち合わせてる企業と連携して、製品やシステムを構築してゆくことができると考えています。

Q最後に、読者に伝えたいことは？

A 星光社が、世の中に誇れることが三点あります。

一番目は、これまで、積み上げてきた歴史です。

今回、社内報に記している事柄は、極々一部で、多くの人が携わり、その誰か一人でも欠けても、今の星光社はないと思っています。

二番目は、お客様に愛されていることです。

私たちが製品や、システム、サービスを提供できるのは、星光社に対する安心感、そして、信頼感を、お客様が抱いていただけているからです。

三番目は、仕事が面白いことです。

仕事とは、互いの意見や考えを交わし、尊重して、事柄を進め、成果を上げるものだと考えています。そして、社員一人ひとりが、お互いの関係性を理解し、主体的に行動することができれば、仕事に対しての面白さを感じることができると、私は思っています。

ただ、三番目については、まだまだ十分とは言えませんので、社員一人ひとりが、仕事に面白さを感じることができるように努めていきますので、よろしくお願いします。